大学で行われる研究発表の質疑応答に関する研究の動向

Research Trends regarding Question and Answer Sessions for Research Presentations Given at Universities

徐 煉

要旨

本論文は、2023年4月までの大学で行われる研究発表の質疑応答を対象とした論文の動向を概観したものである。「国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース」と「CiNii Research」で検索した53本の論文をまとめた結果、対象とする論文における研究発表の性質からみると、「ゼミ発表の質疑応答」「授業で行われる研究発表の質疑応答」「論文発表会の質疑応答」の3つに分けることができた。また、対象とする論文の着眼点からみると、参加者の発話への着眼では「談話構造」「使用表現」「発話機能」「発話内容」に関する研究が見られた。一方、参加者の意識への着眼では「感想・気づき」と「参加変容のプロセス」に関する研究が見られた。分析結果を踏まえ、今後期待される研究として、「授業で行われる研究発表の質疑応答」に関する研究、参加者の発話の機能・内容、発話自体の変化および参加者の多様な属性に注目する研究を挙げた。

キーワード：質疑応答、動向、発話、意識、ゼミ

1. はじめに

大学・大学院での学習や研究活動を行う際に必要な日本語の教育を行うアカデミック・ジャパニーズ分野では、「講義を聞く技術」「口頭発表・討論の技術」「速読力」「論理的な文章を書く力」が不可欠な能力として強調されている（門倉 2003）。そのうち、口頭発表・討論の技術は、授業のプレゼンテーション、ゼミナール（以下、ゼミ）や発表会など研究発表に関する多様な場面において問われている。こうした場面では、研究発表の内容は事前に準備することができるが、その後の質疑応答は、常に学生の現場での対応力が必要であるため、困難を感じている学生が少なくない（黄 2017、仁科 2018）。それにもかかわらず、近年大学で行われる研究発表の質疑応答に関する先行研究が増加してきている一方、それら研究の動向を論じたレビュー論文はまだ見当たらない。本研究は、2023年4月までの大学で行われる研究発表の質疑応答を対象とした論文の動向を概観したうえで、今後どのような研究が期待されるかについて論じる。

2. 先行研究・本研究の位置づけ

福良・横川（2022）は、日本語初級から上級レベルまでの留学生向けの体系的なプレゼン教育方法を開発するため、Google Scholar と CiNii Research を用いて 2015 年から 2020

年刊行された関連論文 58 本を概観した。その結果、プレゼン教育の着眼点から論文を分類すると、「授業実践」「評価」「発表スピーチ」「ビジネス日本語関連」「データの扱い」「発表資料」「質疑応答」という 7 つのカテゴリーがあったが、「授業実践」と「評価」に関する研究が半数以上と占めており、「データの扱い」や「発表資料」「質疑応答」など具体的なアカデミック能力養成に関する研究は限られていることがわかった。

上記の分析結果からみると、「質疑応答」に関する研究はほかのカテゴリーより少なかったが、福良・横川（2022）は留学生向けのプレゼン教育に焦点を当てて文献を検索しているため、母語話者の質疑応答のみに注目する研究や教育を目指さない質疑応答の研究が含まれていない可能性が高い。本研究は、大学で行われる研究発表の質疑応答に関する研究の全体像を把握するため、先行研究の着眼点に限定せず、質疑応答および関連のキーワードで検索したすべての文献を分析対象に入れて分析する。

3. 調査対象と分析方法

調査対象の選定について、まず、「国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース」で「口頭発表」「研究発表」「質疑応答」「ゼミ」「セミナー」「学術場面」「プレゼン」という 7 つのキーワードをそれぞれ入力して論文を検索した。これらのキーワードは、大学で行われる研究発表の質疑応答について数本の論文を発表した仁科喜久子、嶺川由季、仁科浩美の論文から選出したキーワードを調整したものである。「国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース」は 2020 年までの論文しか更新されていないため、2020 年以降の論文は、「CiNii Research」で検索して追加した。

調査概要は以下の表 1 に示す。

表 1 データベースと検索キーワード

データベース	①国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース ②CiNii Research
検索キーワード	口頭発表、研究発表、質疑応答、ゼミ、セミナー 学術場面、プレゼン

この 2 手順で検索したものから、大学・大学院の授業や発表会など以外で行われる質疑応答を対象とした論文、発表者の研究活動に関わらない口頭発表の質疑応答を対象とした論文、分析手法が用いられていない報告書や展望、博士論文を除外した。検索した結果、1993 年から 2023 年 4 月までの 53 本の論文（文科系 27 本、理工系 26 本）には、日本語母語の質疑応答のみ対象とした研究は 8 本、留学生の質疑応答を対象とした研究は 20 本、両方を対象とした研究は 25 本であった。次節より、この 53 本の論文について、対象とする論文における研究発表の性質と分析の着眼点に分けて分析・考察する。

4. 分析結果

4.1 対象とする論文における研究発表の性質

対象とする論文における研究発表の性質をみると、大きく「ゼミ発表の質疑応答」「授業で行われる研究発表の質疑応答」「論文発表会の質疑応答」に分けることができる。53本のうち、ゼミ発表の質疑応答を対象とした研究は35本で6割を超えている。授業で行われる研究発表の質疑応答を対象とした研究は13本で24.5%を占めている。論文発表会の質疑応答を対象とした研究は5本で最も少なく、全体の9.5%である（表2）。

表2 研究発表の性質および論文数の集計

性質	論文数	割合
ゼミ発表の質疑応答	35	66.0%
授業で行われる研究発表の質疑応答	13	24.5%
論文発表会の質疑応答	5	9.5%
	53	100.0%

以下、この3種類の質疑応答について論文を概観する。

4.1.1 ゼミ発表の質疑応答

大学で行われる研究発表の質疑応答に関する研究は、ゼミ発表の質疑応答に対する分析に始まり、その源流をたどると、仁科久喜子（1993）にたどり着く。仁科喜久子を代表とする研究グループは1993年から1994年の間の5本の論文を通して、理工系のセミナーでの質疑応答における対話の理解過程とその構造、母語話者と非母語話者によるコミュニケーション・ブレイクダウンの実態を明らかにしている。特に対話の理解過程を分析して理工系学生への教育向けのシラバス作成について提言を行った仁科久喜子（1994）は、初めて大学での研究発表の質疑応答の実態を分析して日本語教育に生かす試みであった。

理工系ゼミの質疑応答に関する研究は、1999年まで一時的に盛んになっていたが、2000年から2009年の9年は停滞し、関連研究が見られなかった。2010年以降、理工系ゼミの質疑応答に注目する研究が再び多くなり、分析観点も仁科久喜子らの対話理解と構造の分析から、ゼミの発話に使用された品詞やコロケーション、学生の相互行為、発表資料の引用・解釈・データ提示、学生の研究内容の変容と実践共同体の関係性へと変化し、90年代よりかなり豊富な内容になっている。

一方、文科系のゼミ発表の質疑応答に注目したのは、嶺川（1998）である。嶺川は、1998年から2001年の間の5本の論文を通して、日本人学生と留学生がゼミの質疑応答で用いた談話マーカの比較、「対話」と「共話」の観点から母語話者の発言の特徴やコミュニケー

ション・ブレイクダウンの修復について分析している。

理工系ゼミの質疑応答に関する研究と同様に、文科系ゼミの質疑応答も2000年代が少なく2本しかなかった。2010年以降は、留学生がゼミの質疑応答に参加する際の意識に焦点を当てる研究が急増し、正統的周辺参加論という学習理論の援用、KJ法やPAC分析などのインタビューを分析する手法が見られるようになった。また、理工系には見られなかったが、文科系では、2020年以降、オンラインゼミの質疑応答について論じた研究が近年5本も出現している。代表的なものとして、オンラインゼミの質疑応答のコミュニケーション活動に注目した石黒（2022）と、学生の気づきを書かれた記述レポートを分析して2年間のゼミナール活動をふりかえた中尾（2022）が挙げられる。このことは、コロナ禍の影響でオンラインゼミが増加しているためだと考えられる。

4.1.2 授業で行われる研究発表の質疑応答

大学の授業で行われる研究発表に関する研究は、2004年から2015年に集中しており、学部生の卒業論文や大学院進学を目指す留学生の研究計画書の作成を支援するものである。これらの授業は、多様な分野の学生が聴者として参加することがあり、この点においてゼミや発表会のような特定の分野の学生が集まって質疑応答を行うものとはかなり性格を異にする。

これらの論文は本数が13本とゼミの質疑応答を対象とした研究ほど多くなく、いずれも留学生の質疑応答能力の向上を目指したものであるが、研究報告場面のメタ表現、発話の調整、留学生の意識など多様な分析観点が見られ、特徴的なものとして、日本語レベルが低い初級日本語学習者を研究発表の質疑応答に参加させる試みの授業が観察された。

また、これまでの研究は、発話の使用形式に注目するものであったが、金（2006）は、質疑応答の談話を内容面から分析する必要性を唱え、大学院進学を目指す研究留学生の研究発表の演習授業において質疑応答における質問者の発話を内容面から分析し、質疑応答で行われた「質問」は発表者自身の発表内容と学習のプロセスを内省する機会を与えていることを検証している。この研究は管見のかぎり、授業で行われる研究発表の質疑応答を対象として研究において唯一内容面に焦点を当てたものである。

4.1.3 論文発表会の質疑応答

学生の論文発表会の質疑応答に注目したのは、仁科浩美らの一連の研究である。いずれも理工系の学生が修士論文発表会の質疑応答において使用した行動・動作、ストラテジーと特定の表現を対象としたものである。

仁科浩美（2013）は、5名の留学生が行った修士論文発表会での質疑応答における沈黙時の行動・動作を分析した結果、パソコン操作で会話が切断されるほどの長い無音声を観察された一方、1秒未満の視線やジェスチャーなどの非言語コミュニケーションで会話を進める

こともあったということを明らかにしている。この文献は、質疑応答を対象とした 53 本の中で唯一非言語的行動を分析したものである。

また、仁科浩美 (2014) は、発表者と質問者との間のコミュニケーション・ブレイクダウンに注目するという点からみると、仁科喜久子の 1990 年代の一連の研究と同様であるが、コミュニケーション・ブレイクダウンが発生した要因について語用論的な問題や質問者である教員との関連性を取り上げて言及した点が特徴的である。

4.2 対象とする論文の着眼点

対象とする論文の着眼点からみると、「参加者の発話」に注目する研究と「参加者の意識」に注目する研究に分かれる。53 本のうち、「参加者の発話」は 38 本で 7 割を超えており、発話の「談話構造」「使用表現」「発話機能」「発話内容」に分類できる。一方、「参加者の意識」は 15 本で 28.3%を占めており、参加者の「感想・気づき」「参加プロセスの変容」に分類できる。各分類とその論文数・割合は以下の表 3 に示す。

表 3 着眼点および論文数の集計

着眼点	分類	論文数	割合
参加者の発話	談話構造	17	32.1%
	使用表現	12	22.6%
	発話機能	6	11.3%
	発話内容	3	5.7%
参加者の意識	感想・気づき	10	18.9%
	参加プロセスの変容	5	9.4%
	総計	53	100%

次節より、「参加者の発話」に注目する研究と「参加者の意識」に注目する研究に分けて論文を概観する。

4.2.1 参加者の発話

本節では、「参加者の発話」に関する研究を「談話構造」「使用表現」「発話機能」「発話内容」の 4 つの観点から概観する。

「参加者の発話」に関する研究において最も多く見られたのは、「談話構造」に注目するものである。大学で行われる研究発表の質疑応答が初めて分析対象として取り上げられたのもこの種の研究である。1993 年から 2004 年の間は、留学生がどのように質疑応答の対話を理解するかまたは母語話者がゼミでやりとりを行う際の特徴に焦点を当てる研究が多

かったが、2007年以降、伝統的な授業・ゼミではなく英語を主言語としたゼミ、複数言語使用のゼミ、オンラインゼミ(石黒 2022)という特殊の環境のもとにある研究発表の質疑応答が研究されており、特に学生の発話データを用いて相互行為分析を行う研究が2015年以降急速に増えている。石黒(2022)は、大学院のオンラインゼミの談話を質的に分析した結果、オンラインゼミの参加者が頻繁な話者交替を通し、沈黙による気まずさを避ける多様な方略を用いて話し合いに積極的に参加していることを明らかにしている。

一方、「使用表現」を分析対象とする研究は12本あり、その分析観点は、参加者の発話において使用された品詞、コロケーション、談話マーカー、質問の表現、メタ言語表現、待遇表現など多岐にわたる。これらの研究は、留学生の口頭の専門日本語能力の向上を目指し、1998年から2007年は、調査者らが各自で質問応答の場면을収録し、留学生が使用した日本語の表現だけではなく、母語話者との比較も取り入れられている。しかし、2010年以降、調査者の個別収録による小規模の調査のかわりに、コーパスを用いて大量の言語資料を分析する研究が4本出現している。この4本はいずれも複数の調査者によって書かれたものである。たとえば、山口ほか(2010)は、工学系の留学生や外国人研究員の研究生活を支援するために構築した「工学系話し言葉コーパス」を用い、大学院ゼミ内発話における和語動詞の使用実態を分析した結果、和語動詞はすべて日本語能力試験3、4級レベルのものであるが、動詞とコロケーションをなす名詞は大半2級以上であり、初級レベルの和語動詞と組み合わせて使用されていると述べている。

また、「発話機能」に関する研究は6本で多くはないが、1994年から2014年にわたって異なる属性を持つ参加者の質疑応答の特徴を明らかにしている。これらの研究は仁科久喜子(1994)をはじめ、留学生が母語話者とのコミュニケーション上において発生したコミュニケーション・ブレイクダウンの実態を明らかにしており、ゼミや論文発表会に参加した上級留学生だけではなく、日本語能力が足りない初級学習者が研究発表の質疑応答に参加できるかを観察する授業の談話データも分析されている。しかし、ストラテジーに関する研究は、2020年以降でも行われている「談話構造」「使用表現」とは異なり、2014年以降見られなくなっている。一方、機能面から質疑応答を分析する研究は2本あり、いずれも「発話機能」の観点を取り入れて分析を行っている(仁科 1994、徐 2021)。ただし、仁科久喜子(1994)がコミュニケーション・ブレイクダウンの分析に限定しているが、徐(2021)はゼミの質疑応答におけるすべての発話を対象とし、質問・コメントを行う発言者と研究発表を行う発表者別にその発話の特徴を解明している。

「発話内容」に関する研究は、「参加者の発話」において最も少ないものであり、3本しかない。4.1.2節で紹介した金(2006)以外、生天目・大島(2017)が挙げられる。生天目・大島(2017)は留学生が工学分野の大学院ゼミに参加する際の口頭発表および質疑応答の談話を対象とし、質疑応答において資料の引用・解釈に関する問題として「情報の出典の不明瞭さ」「主張の裏付けとしての資料不足」「先行研究の位置づけ方」を指摘している。

4.2.2 参加者の意識

「参加者の意識」に関する研究は、山田（2009）の正統的周辺参加論からゼミ活動の学びを巡る視点と有効性を検討するという研究によって始まっている。「参加者の発話」より15年も遅れており、本数自体も少ないが、ここ数年急増している。これらの研究は、質疑応答の参加者が感じたこと、気づいたことを分析する「感想・気づき」、参加意識や研究内容の変容を分析する「参加プロセスの変容」の2種類があった。いずれも参加者に対するインタビュー調査が中心であり、質疑応答を行う環境への適応や日本語の使用など複数の観点から学生の語りを分析している。

「感想・気づき」に関する10本の研究において、仁科浩美（2013）をはじめとした一連の研究は、留学生が口頭発表の質疑応答に参加する際の意識と態度を母語話者と比較するもの、質疑応答の経験が浅い修士課程1年生の感想を分析している。仁科浩美（2013）は、修士課程を1年経過した留学生2名の口頭発表時の質疑応答に対する意識と態度をPAC分析の手法で分析し、留学生は、質疑応答の意義をよく理解していて積極的に取り込んでいるが、質疑応答の回答で言葉を駆使して説明を行うこと、アカデミックな日本語の使用に苦慮していることを明らかにしている。2020年以降、コロナ禍がいかにかに学生の質疑応答に影響を及ぼすかを分析する研究が5本も増えている。分析観点として、ゼミの運営と実践、オンラインゼミの質の向上が挙げられる。

一方、「参加プロセスの変容」に関する5本の研究において、ゼミの新参者やオンラインゼミの参加者の参加プロセスの変容が注目されている。黄（2017）は、文科系大学院ゼミにおける質疑応答に参加する新参者がどのように困難を乗り越えて活動参加を深めてきたのかについて調査し、中国人留学生1名に対して15回の半構造化インタビュー調査を実施し、その変容プロセスをKJ法で描いている。コロナ禍の影響を受けてオンラインに切り替えたゼミにおける参加者の意識の変容について、中尾（2022）は、学生の2年間のゼミナール活動の振り返りを分析し、コロナ禍のラボラトリー方式の体験学習という観点から授業記録とゼミ参加者のレポートの内容を検討している。また、半構造化インタビューを通して参加者のゼミ共同体との関わりとともに研究内容の変容プロセスも分析している研究もある（正司・尾澤2022）。

5. 考察

前節までは、大学で行われる研究発表の質疑応答に関する53本の論文を概観してきた。

分析結果で示したように、大学で行われる研究発表の質疑応答に関する研究は、1990年代から仁科喜久子の理工系ゼミと嶺川由季の文科系ゼミに対する一連の研究から始まっているが、盛んになったのは2010年以降である。その理由として、近年日本の大学に在籍する留学生や外国人研究員が増加していること（山口ほか2010）、日本企業への就職は口頭発

表能力や討論する能力が求められていること（仁科浩美 2013）が考えられる。

対象とする論文の研究発表の性質において、全体の 66%を占めている「ゼミ発表の質疑応答」と比較すると、「授業で行われる研究発表の質疑応答」は 24.5%で多いとはいえなかった。これは、口頭発表の実践授業のような演習場面というより質疑応答が行われる本場であるゼミのほうが好まれることを示している。しかし、金（2006）が指摘しているように、日本語の口頭発表授業に質疑応答を組み入れることは、研究発表に関する批判的思考力の養成に役立てることができる。また、専門領域授業で行われる研究発表の質疑応答の参加者は様々な専門領域の学生であり、特定の領域のバリアを越える重要な場面としてさらに研究していく必要があると思われる。一方、「論文発表会の質疑応答」はゼミの同様に質疑応答の正式な場であるが、それでも少なかったのは、データ収集が困難であることが考えられる。

対象とする論文の着眼点について、「参加者の発話」に注目する研究は多かったが、「談話構造」「使用表現」への分析に集中しており、「発話内容」はあまり見られなかった。また、「発話機能」において、機能に対する分析がコミュニケーション・ブレイクダウンという特定の現象を解明するために行われており、機能面から質疑応答の全体像を明らかにしたのは管見のかぎり徐（2021）のみである。また、これらの研究は、いずれも横断研究であり、縦断的に「参加者の発話」を見ていく研究はまだ見当たらない。参加者の属性を分析する際も、日本語母語話者と留学生を比較するものがほとんどである。しかし、「参加者の意識」を対象とする研究で指摘されているように、留学生が質疑応答への参加において多くの不安を抱えており、参加経験の浅い学生が何回も参加することによって不安が解消されることが近年多く報告されている（黄 2017、仁科 2018、徐 2022）。したがって、今後、「参加者の発話」に関する研究において、発話の変化、参加経験の多寡など参加者の多様な属性を分析する研究も期待されるのではないかとと思われる。

6. まとめと今後の課題

本研究は、「国立国語研究所 日本語研究・日本語教育文献データベース」と「CiNii Research」を用いて 2023 年 4 月までの大学で行われる研究発表の質疑応答を対象とした論文の動向を概観した。53 本の論文について、対象とする論文における研究発表の性質と対象とする論文の着眼点を分析した結果、対象とする論文における研究発表の性質において、「ゼミ発表の質疑応答」「授業で行われる研究発表の質疑応答」「論文発表会の質疑応答」の 3 つの分類が見られた。一方、対象とする論文の着眼点において、「談話構造」「使用表現」「発話機能」「発話内容」という参加者の発話に関する研究と、「感想・気づき」と「参加変容のプロセス」という参加者の意識に関する研究が見られた。こうした分析結果を踏まえ、期待される研究として、「授業で行われる研究発表の質疑応答」に関する研究、参加者の発話の機能・内容、発話自体の変化および参加者の多様な属性に注目する研究を挙げた。

今後、これらの観点を取り入れて研究を進めていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり、国立国語研究所の石黒圭先生にご意見・ご指導をいただきました。

参考文献

- 石黒圭 (2022) 「コロナ禍におけるオンライン・ゼミナールの可能性—オンラインのゼミ談話に見るコミュニケーション活動の豊かさ—」『社会言語科学』25 (1)、社会言語科学会、pp.39-54
- 金孝卿 (2006) 「研究発表の演習授業における『質疑・応答』活動の可能性—発表の内容面に対する『内省』の促進という観点から—」『世界の日本語教育』16、国際交流基金日本語国際センター、pp.89-105
- 徐煉 (2021) 「大学院のゼミ談話における質疑応答の特徴の分析：発話カテゴリーと発話機能の設定に向けて」『一橋日本語教育研究』9、pp.61-75
- 徐煉 (2022) 「大学院ゼミの質疑応答の対応の特徴—参加経験が異なる中国語母語話者を比較して—」『中国語母語話者のための日本語教育』13、pp.62-77
- 中尾陽子 (2022) 「コロナ禍のラボラトリー方式の体験学習：2年間のゼミナール活動をふりかえる」『人間関係研究』22、南山大学人間関係研究センター、pp.13-63
- 生天目知美・大島弥生 (2017) 「工学分野のゼミにおいて指摘された資料の引用・解釈に関する問題点とその特徴」『専門日本語教育』19、専門日本語教育学会、pp.25-32
- 仁科喜久子 (1993) 「理工系留学生のセミナーでの対話にみられるパラフレーズから理解に至る過程のプロトタイプ化の試み」『情報処理学会研究報告』93 (76)、一般社団法人情報処理学会、pp.37-44
- 仁科喜久子 (1994) 「理工系留学生のセミナーでの対話理解過程の分析—理工系学生のシラバス作成に向けて」『日本語教育／日本語教育学会学会誌委員会編』84、日本語教育学会、pp.40-52
- 仁科浩美 (2013) 「日本語による口頭発表時の質疑応答に対する留学生の意識と態度—修士課程を1年経過した留学生の事例から—」『小出記念日本語教育研究会論文集』21、小出記念日本語教育研究会、pp.31-43
- 仁科浩美 (2014) 「理工系留学生の発表場面における質疑応答の課題—コミュニケーション・ブレイクダウンの観点から—」『専門日本語教育研究』16、専門日本語教育学会、pp.37-44
- 仁科浩美 (2018) 「学生のプレゼンテーション時における回答困難な質問への対応」『工学教育』66 (2)、工学教育、pp.18-23
- 黄均鈞 (2017) 「新参加者が大学院ゼミにおける質疑応答活動にどのように参加しているか—ある中国人留学生への縦断的調査から見えてきたもの—」『言語文化教育研究』15、言語文化教

育研究会、pp.153-171

福良直子・横川未奈(2022)「日本語初級から上級までの体系的なプレゼンテーション教育方法開発のための基礎研究—2015年から2020年に刊行された文献の調査から—」『専門日本語教育学会研究討論会誌』23、pp.14-15

門倉正美(2003)「アカデミック・ジャパニーズとは何か」『日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ』pp.123-132

嶺川由季(1998)「セミナーにおける談話マーカの使われ方：日本人と留学生の比較」『ニダバ』27、西日本言語学会、pp.136-144

山口真紀・菅谷有子・単娜・古市由美子・村田晶子(2010)「工学系話し言葉コーパスにおける和語動詞の使用実態—名詞との共起パターンの調査—」『専門日本語教育研究』12、専門日本語教育学会、pp.41-46

山田嘉徳(2009)「ゼミ活動における学びを探る視点とその有効性—正統的周辺参加論に基づくゼミ活動に着目して—」『文学部心理学論集』3、関西大学、pp.35-44

(じょ れん 一橋大学言語社会研究科 博士後期課程)